

動乱の時代の関西日仏学館(1940-1945)

ミシェル・ワッセルマン

(立木康介 訳)

自分がかつて 8 年間も暮らしたこの建物のなかでお話するとき、私はいつも胸が熱くなります。私はこの建物に住んだ最後の本学館館長でした。このすばらしい学館の館長を務めたこと、そしてヴィラ九条山と京都フランス音楽アカデミーの創設に本学館館長としてかかわった経験の大きさが、私のうちにとくに大切な思い出を呼び覚ますことは、申し上げるまでもありません。

そのようなわけで、立木康介氏と彼が率いる若き研究者たちのチームに私がいかに好意を抱き、彼らがフランス外交文書センターに収集しに出かけた貴重な資料に私がどのような関心を寄せているか、みなさんにもお分かりいただけるでしょう。今日、ラ・クールヌーヴとナントの二つのセンターに収蔵されているこれらの資料から、私は本学館の歴史について多くのことを学びました。とりわけ、「新館」〔1936年に落成した現在の IFJK の建物〕の建設について私が昨年 6 月にこの同じ場所で行った講演〔2016 年 6 月 16 日、関西日仏学館竣工 80 周年記念「80 年に渡る日仏交流」での講演「九条山から吉田へ」〕の準備は、これらの資料がなければたいへん困難だったにちがいません。

第二次世界大戦という苦難の時期の学館について私がここで話するというのは、もともと立木氏のアイデアでした。私がこの歴史を語るに最もふさわしい人物であると、彼が考えてくれたのです。事実、大戦期の学館というテーマにはつねに興味を抱いてきましたので、こうして与えられた機会にそれをより悉に調べることができたことを嬉しく思います。ところが、この苦悩の時代にかんして、私たちの手にしている資料がじゅうぶんに満足のいくものであるかという、それは定かではありません。よろしければ、これらの資料を枚挙することからはじめましょう。

まず、クローデルが駐日大使であった時代に創設されたニカ国財団「日仏文化協会」の年次活動報告書があります。同協会は長らく本学館の法的後見人の役を務めてきましたが、近年、その役は、海外文化活動にかかわるフランス外務省の拠点、アンステイチュ・フランセの手に引き継がれました。この年次活動報告書は、私たちが扱う時代(1940～45年)については各年揃っていますが、残念ながら、韜晦的であったり中身の少ないことを述べていたりすることがしばしばで、そうでない場合には、毎年同じ空疎なお役所表現を一字一句違わず繰り返しているにすぎません。

それよりずっと多くのことを教えてくれるのは、「関西日仏学館活動概要報告書 1936～

1946」と題された資料です。こちらはより個人的なレポートであり、戦後に完全な自由のもとで書かれただけあって、情報量も豊富です。しかし残念ながら、外交文書館に保存されているバージョンは、1942～43年度の記録が書かれた最初の数頁以降が失われており、その理由は不明です。そのため、この文書からは、戦時中の最後の三年間の情報が得られません。

最も活き活きとしていて、最も情報に富んでいるのは、かつて私を驚かせたテキストです。実際、その文書は本学館のアーカイヴに含まれていて、私は、言ってみれば、その文書とともに寝起きしていたこととなります。それは、本学館のレジェンドといってよい人物、ジャン＝ピエール・オーシュコルヌが、個人的に利用する目的で1956年に書いた文書です。オーシュコルヌは、国民教育省の制度に則る地位を得ようと、フランス政府に度々願い出ましたが、その何度目かの申請の際にこの文書を提出したのです。クローデルの時代の在神戸フランス領事アルマン・オーシュコルヌの息子であるジャン＝ピエール・オーシュコルヌは、1938年から常勤職員として本学館に雇われ、講師として教鞭を執ると同時に、事実上の副館長の職責も果たしました。それゆえ、オーシュコルヌは本学館において戦争を経験したのであり、とりわけ、1945年度がはじまる四月、帝国陸軍向け精密機器の工場を設置するために、本学館が日本政府に接收されたドラマティックな時期については、感情のこもった力強い記述を残しています。オーシュコルヌと、本学館事務局長の宮本正清は、このとき特別高等警察により収監され、飢餓状態に置かれるとともに、暴行も受けました。

以上が私たちの手にしている資料のすべてであり、与えられた主題の重要性を考えれば、実のところ手厚いとはいえません。というのも戦争、とりわけ20世紀を血で染めることになった二つの大戦の間中フランスとドイツを対峙させた戦争は、よく考えてみれば本学館から、取えていうなら本学館の性格や機能から、つまりそれが構想された理由から、けっして遠く離れた出来事ではなかったからです。クローデルが1924年に東京の日仏会館を、その三年後に関西日仏学館を創設したのは、実際、この新任の駐日フランス大使が外務省から授かったミッション、すなわち、1918年のドイツ帝国敗戦後も変化がなかった、日本の教育界・文化界におけるドイツの隆盛にたいして、フランス語教育の発展と日仏の文化融合によって決然と闘うというミッションの一環をなす事業だったのです。我等の「かつての敵は、この間にただ我等の競争相手になったにすぎぬ」と、クローデルは書いています(そしてその後、ヒトラー政権が誕生するに及んで、ドイツは元の地位、すなわち「敵」の地位に戻ることになります)。それゆえ、爾後はドイツにたいして、今日の言葉でいう「ソフト・パワー」を対峙させるのがよい、と。このソフト・パワーは、20世紀初頭においては、文化プロパガンダ活動をコーディネートする「海外事業部」がフランス外務省に設置されたこと、そしてまた、世界中にアリアンス・フラ

ンセーズ及びアンスティチュ・フランセの緊密なネットワークが構築されたこのうちに、見てとることができます。

京都において、この仏独競合は、1930年代、特段に目を惹くかたちで露わになりました。二つの強国は、京都大学を目の前にした4000平方メートルの土地を争ったのです(その結果はよくも悪くも引き分けに終わりました)。1932年に本学館第三代館長に就任したルイ・マルシャンは、外国語としてのフランス語の教育を長年実践してきた経験から、1927年に本学館の建てられた九条山が、京都市の中心から外れ、交通の便も悪いため、本学館は目立たぬ存在であることを余儀なくされている、とたちまちこう確信するに至ります。曰く、「大学の中心地から遠く、アクセスしにくいえ、階段やら坂やらを登らねばならないという条件が合わさって、学生たちが近寄らなくなっているようだ」と。そこでマルシャンは、京都大学の目の前の、最近空き地になったばかりの国有地、すなわち、私たちがいまいるこの土地に目をつけ、そこに分館を建築する意義があるという自らの確信を、稲畑勝太郎に共有してもらうことに成功しました。稲畑勝太郎とは、関西の財界に働きかけて九条山の校舎建設の資金集めの指揮を執った親仏家(で完璧な仏語話者)の大実業家です。ところが、時を同じくして、なんとワイマール共和国のドイツ人たちも、新設予定の「独逸文化研究所」の用地を求めて、この同じ土地を譲ってほしいと日本政府にもちかけ、困った日本政府は、ソロモンの判決よろしく、正確に半分ずつの土地を両者に与えることで問題を落着かせました。すなわち、一筋の路地を挟んで、北側をフランスに、南側をドイツに売却したのです。二つの敷地を分割するこの路地は、今日も残っています。

用地が決まれば、次には建設を行わねばなりません。マルシャンは、日本側の出資者たちが僅か数年前に合意してくれた九条山の学館建設のための莫大な投資を無駄にするのを憚り、慎重を期して、当座は授業を行う場所を提供するだけの木造校舎を建設し、学館のその他の機能(図書室、文化活動、館長宿舎)は九条山に残すことでよしとすることを提案しました。ところが、そうこうするあいだに、ヒトラーが政権を奪い、ドイツ研究所は1934年にオープンしてしまいます。名高い日本研究者である初代館長〔ハンス・エッカート Hans Eckardt, 1905-69〕は、その前年にナチに入党していました。すると、早くも34年4月10日の日仏文化協会理事会において、マルシャンは、このような状況下で競争相手よりも下手なものを作るわけにはいかないと述べ、鉄筋コンクリートの学舎を建設し、それをイデオロギー闘争に投入するという案を打ち出します。その学舎は、他でもなく「世界にフランスが占める座」を例証するという明示的なミッションをもつだろう、というのも世界において、フランスは「ヒューマニティ、連帯、普遍的同胞愛といった心情」を際立たせるのであり、実際、フランスは「肌の色や人種にかかわる偏見」に無縁であるのだから、と。

おそらくこの競争に闘志を掻きたてられたのでしょう、稲畑は新館の建設に 10 年前よりもいっそう熱意をもってかかわり、早くも 1934 年 11 月に、パリの海外事業部部長に向けて、「すでに存在しているお隣の建物よりもっと立派な建物を」建てるつもりであると請け合っています。日仏学館の学舎の設計は、鉄筋コンクリートの伝道師と呼ばれたオーギュスト・ペレのフランス人の弟子レモン・メストラレに託され、こうして 36 年 5 月に竣工した新学舎は、構想にいっそうのまとまりがあった点でも、箱の大きさの点でも、新古典主義様式の建築の美しさという点でも、ドイツ研究所の建物を凌ぐものでした。それを目にした京都市民は好奇心を掻きたてられ、敵対するこの二つの国の文化センターが闘鶏のように向き合って身構えるのを、面白がって見ていました。37 年の万国博覧会の折にナチス・ドイツとソヴィエト連邦が建設したバヴイリオン同士の記憶に残る対決を目にして、パリ市民たちが抱くことになる感覚に似たものを、京都の人々はパリ市民たちに一年先んじて体験したというわけです。

以上のような独特の文脈に、この四年後、学館における第二次世界大戦という主題が書き込まれることになります。つまり、この文脈が背景にあるからこそ、枢軸国のひとつであり、しかも(1940 年 9 月には)仏領インドシナ北部を占拠するに至った日本において、フランスの文化インスティテュートの誇り高き建物が、フランスに残りうる僅かな自信の欠片でもって、ドイツの建物を、すなわちフランス本土を占領し、傀儡政権を介してフランスを統治している国の建物を、睥睨する、という状況が生まれたのです。日本はこの点において特異な例外でした。ドイツやオーストリア、イタリアでは、アンスティチュ・フランセ(あるいはヴィラ・メディシスやローマ・フランス学院)が次々と閉鎖されていきました。これにたいして、東京の日仏会館および京都の日仏学館は、業務を縮小したとはいえ、1944～45 年度の学年末(3 月 31 日)まで、どうにかこうにか機能し続けるのです。たしかに、京都では、節約のためただちに活動の規模を縮小する必要がありました。1940 年 9 月には専門講義の大半を畳み、講師陣の頭数を 22 人から 10 人にまで減らさざるをえませんでした。にもかかわらず、講演会やコンサートの開催頻度は一定程度を保ち続け、しかも 41 年 1 月末には「医学の進歩へのフランスの貢献」をテーマにした展覧会が開かれます。そのセノグラフィーを手がけたのは、当時日本政府のもとで装飾芸術の顧問を務めていた偉大な建築家シャルロット・ペリヤンでした。医学関連の五つの講演によっても飾られたこのイベントは、たいへん盛況だったらしく、「関西日仏学館活動概要報告書 1936～1946」を書いた匿名の筆者(ジャン＝ピエール・オーシュコルヌである可能性が高い)によれば、「独逸文化研究所は日本政府にたいし、「ヨーロッパ共栄圏」においてフランスが甘んじなくてはならない卑しい隷属状態と相容れぬ知的活力をもったイベントを中止させるよう、公式に申し入れた」ほどでした。時局の大きな困難にもかかわらず、フランス政府から定期的な補助を受けていた本学館は、インドシナ総督府からの特別給付

金を利用して、さらに、ある電気専門学校の敷地内に、大阪分校を開校することすらできました。パール・ハーバーと国民総動員にもかかわらず、学館の授業に登録する生徒数は、45年3月まで満足のいく水準を保ち続けました。ただしその一方で、館長マルセル・ロベールと、どんなときにも献身を忘れないジャン・ピエール・オーシュコルヌは、フランス本土から訪れる講演者が途絶えた穴を埋めるため、講演に講演を重ねました。ところで、本学館の文化プログラム構成において、音楽は、本学館がプレイエル製のピアノを所有していたことから分かる通り、知的協働に次ぐ第二の軸となっていました。今日、世界一音楽好きの国と言われる日本(戦争直前の時期を通じて、クラシック音楽のレコードを最も多く輸入した国も日本でした)は、すでに西洋音楽の技法をじゅうぶん習得しており、それに付随してフランスのレパートリーにも通じていたので、現地の演奏家や歌手が登場する一定レベルのリサイタルやコンサートを戦時中もずっと続けることができたのです。

戦時の不自由さは、とにかくにも、それ自身の掟を課さずにはおきません。マルシャンが「学びの中心地というだけでなく、さらに美の集積地、フランス美術の常設展示」とすることを望んだ学館の美しいアール・デコ調内装などを、そうした掟が気にかけてくれるはずはありません。1942年4月11日、マルセル・ロベールが理事会で報告したところによると、「国防の必要から、鉄格子やランプ、そして広く新館の金属製品すべてを供出するようにと、日本政府から申し入れがあった」といいます。こうして多くの装飾品を失った新館、すなわち現在の本学館の建物は、この取り返しのつかない損壊をその後もけって元に戻すことができませんでした。

1944年、パリが解放されると、本学館をめぐる政治状況はどうとう根本的に一変してしまいます。フランスはもはや、ナチ帝国に隷属する国、それゆえ戦争中も比較的手心を加えられ、「学館は引き続き日本政府と最良の関係を維持した」と年次報告書が儀礼的に繰り返すもする、そうした国ではなく、打ち倒すべき敵になったのです。実際、その手はじめに、1945年3月、日本は、それまで戦時の大半の期間、ヴィシー行政の上に胡座をかくというかたで事実上占領していたインドシナを、いきなり手中に収めます。京都では、本学館は新年度のはじまる4月に日本政府に接收され、島津製作所が経営する軍事用精密機器工場がこの場所に設置されました。といっても、それはたんなる財産没収ではありませんでした。しかるべき手続きを踏み、借り主が契約期間終了後に建物を原状回復する義務を負うという、学館にとって比較的有利な条件で、一年間貸し出されたのです。その間、ロベールとオーシュコルヌは、たった一台の手押し車を牛に引かせて、吉田新館の家具調度から教材、一万冊にも及ぶ図書館の蔵書まで、九条山に移転させる作業を敢行しました。九条山を一度でも訪れ、あの上り坂の最後のほうの急勾配を経験したことのある方には、この二人のフランス

人が自分たちに課した試練がいかほどのものであったかお判りいただけるはずです。3月から5月にかけて、二人は毎日二往復(牛の労力に配慮して徒歩で、しかも自分たちも頂上まで荷物を背負って)を欠かしませんでした。食料の配給がどんどん覚束なくなるにつれて、その作業がますます過酷になっていったことはいうまでもありません。

6月、オーシュコルヌと学館事務局長・宮本正清は特別高等警察に逮捕され、収監されて、暴力的な取り調べを受けます。この収監の理由は明らかではありません。もしかすると、国家の安全を脅かす陰謀の中心にこの二人がおり、学館がその陰謀の軸を担っているといった嫌疑がかけられたか、あるいは、プロパガンダ目的で二人をそのような人物に仕立て上げることが目論まれたのかもかもしれません。独房でも手錠を解かれることがなかったというオーシュコルヌは、上述の1956年の文書で、共謀者とされる人々の名前を言えと求められ、食事も与えられず、殴られ、殺すぞと脅されたことを告白しつつ、彼が「拷問者たち」と名指す人々から受けた「虐待や脅迫」に屈しなかったこと、当局が彼に確認するよう求めたいいわゆる共謀者のリストを正しいと請け合うのを拒否し続けたことを、誇らしげに語っています。

オーシュコルヌは1945年8月17日、すなわち終戦の二日後に、衰弱した状態で釈放され、米軍病院で手当を受けました。しかしその後、早くも10月15日には、マルセル・ロベール館長とともに、本学館の業務再開に向けて動き出します。当時、建物は惨憺たる状態におかれていました。オーシュコルヌの記述に耳を傾けてみましょう。「セントラルヒーターの放熱器を除いて、建物の金属部分はすべて引き剥がされてしまっていた。大階段の鉄製ランプも完全に姿を消していた。二つの階段のステップを飾っていた銅製の帯、さらには扉を飾っていた数々の鉄工芸品も同様だった。窓ガラスの半分は消失しているか、もしくは割れてしまっていた。図書館の書架という書架がなくなっていた。床板の一部は剥ぎとられていた。トイレの水洗装置も動かなくなっていた。などなど。」

緊急の修繕に踏み切り、教材と家具調度の引越を以前とは逆方向に、しかし以前よりは整った装備で、行う必要がありました。その一方で、九条山はそれ以後再び休眠状態に入ります。それは40年続き、フランス外務省当局ですら九条山の存在を忘れかけていたほどです。ところが、廃墟と化した旧館の危険性を訴える近隣住民のたえまない抗議を受け、1981年、この建物は壊されるに至ります。逆説的にも、このことが九条山を救い、その信じられないような再生に道を拓きました。日仏文化協会は、解体作業の費用を稲畑産業に立て替えてもらっていたので、その負債を解消するために土地を売却することを決断します。1986年、条件に見合う買い手が見つかったため、売却の意思をフランス側に伝えたところ、フランス側は調査団を派遣し、売却は非生産的であると判断するに至ります。すると両者は、芸術家を逗留させるレジデンス「ヴィラ九条山」を、過去の二つの建物に適用されてきたクロ

ーデル方式、すなわち、「器」(建物の建造)は日本、「中身」(運営にかかわる費用の負担)はフランスという方式をここでも採用しつつ、建設することで合意しました。フランスに尽くしての1世紀にわたるメセナ事業にここでも忠実に、稲畑勝太郎の孫で、祖父が創業したファミリー企業の社長〔当時〕を務める勝雄氏が、資金調達の前頭に立ち、このときには京都市および京都府も関西財界に力を貸してくれました。このような善意の結合によって、ヴィラ九条山は1992年にオープンすることができました。

吉田では、早くも1945年の年末から授業が再開されました。それはアメリカ占領軍向けの授業で、当初は本学館にて、次いで、本学館に暖房が入らなかったため、「セントラル・アーミー・スクール」にて行われました。本学館の通常授業も、1946年1月10日に再開されました。建物にはまだ暖房が入らないままでしたが、フランス語、フランス文学、ラテン語の授業のみが開講された冬学期に、延べ244人に上る受講登録がありました。この数字は翌年4月からの学期には2倍に跳ね上がります。

戦争が終わると、本学館の二つの建物の相次ぐ建設を気前よく、かつ決定的なしかたで支えてくれた一方で、自らの企業が軍と協力関係にあった稲畑勝太郎は、心中穏やかでない状態に置かれたようです。というのも、稲畑が起こした染織会社は、日露戦争以来、帝国陸軍制服のカーキ染めにかかわってきたからです。本学館の資料のなかに、1946年3月の日付をもつある文書の写しが残されています。書き手の名前が分かりませんが(おそらくクロベール館長でしょう)、フランス総領事に宛てて、「参議院議員、レジオン・ドヌール勲章グラントフィシエ級、稲畑勝太郎氏」が、「彼がこれまでつねにフランスの忠実な友人であり、私たちの関西日仏学館の創設者のひとりでもあった」ことに鑑み、「彼の身に「困難」が生じたときには、〔総領事の〕お力にお縋りできたらありがたいと願っている」ことを伝える内容になっています。稲畑は同じく、5月末の郵便でも、新たに赴任したフランス大使(より正確には、連合軍総司令官マッカーサーとフランスの連携を図る任務の長官)ペシュコフ将軍に私信を書き、「フランスにたいして私が抱いている愛着の堅固さと重みは一度たりとも揺らいだことがない」ことを伝える考えであると述べています。老稲畑はこのとき84歳でした。彼の身に起こりえた困難が、あと3年に迫った彼の余命に暗い影を落とさなかったことを願うばかりです。

最後にひとつ個人的な思い出をお話しましょう。1979年、若き日本研究者だった私は、コレージュ・ド・フランスで催された「日本学」についてのコロークに参加しました。フランスで日本の伝統芸能をテーマになされた研究を総括することが、そのコロークでの私の役目であり、実際私が日本に惹きつけられてきたのはこの領域においてでした。クロード・レヴィ=シュトローヌや加藤周一といった大御所を前にして、緊張で震えながら発表したのを覚えています。コロークのあと、出席者たちは会場近くのカフェで喉を潤したのですが、私はそこでジャンニピ

エール・オーシュコルヌその人に出会いました。彼と顔を合わせたのは、私の人生で後にも先にもそのときだけです。当時、オーシュコルヌは70歳くらいだったでしょうか、引退してモンペリエのほうに居を移したばかりでした。ただちに好感を抱かせる人物であり、すばらしく話し上手で、しかも休みなくいつまでも話し続けました。戦争中の京都の日仏学館について話してくれた彼の言葉は、強く印象に残り、私の記憶に刻みつけられました。そのとき彼が作り話をしたとは思えないし、そんなことをしても何の得にもならなかったはずです。こういう話題で嘘をつく人がいるでしょうか。しかもこんな話をでっち上げることができるのでしょうか。オーシュコルヌの話によると、終戦前の何か月間かを獄中で過ごしたとき、彼ら囚人に与えられたのは一日に一個のお結びだけでした。同じ憂き目にあった仲間たちは、お結びが配られるとすぐにそれに飛びつき、次々に栄養不良で亡くなっていきました。オーシュコルヌが言うには、彼が肉体的にも精神的にも生き延びることができたのは、日々の唯一の楽しみを長続きさせようと、自らを責めさいなお空腹にもかかわらず、強いてお結びのお米を一粒一粒口に運んだからでした。これほどの自制心を働かせることができたのは、よほど強靱な魂の持ち主だったからにちがいありません。みなさん、どうぞこの並外れた精神力を思い出し、私自身がそしたようにこの逸話を大切に記憶に留めながら、それがけって失われることのないよう、みなさんの周りの方々に伝えていってください。人間存在というものについて、清濁ともに、これほど雄弁に語ってくれる逸話はありません。ご静聴ありがとうございました。